ル 4
4692
1

播磨名所巡覧図会
全五巻

わか葉乃世のこと浅いしおもひ
いくそかしひくら海めくり
とい海るさとしのなしよるも明
石の浦風明くるも秋の
津乃とはかなく洩る事まて
こよなう哀くはなきさうを

塩谷正直
藏書之印

門 ル4
號 4692
巻 1

早稲田大学図書館
昭36.6.21受
藏書

まさに難浪の実風志あるまい
よのしいて八ッ年より流荒山れ
しつめる事かくいあまいかうる流く
其躰三浦くはかりの流る氏
諸せらる人々は播州名所
巡覧圖會として板書にあらは

さしてまんなか一言ともとしの
ロうそ此輪くはう作し道遠
振人はくりして猶しやらい
絡金海よまたを到来三郷よ
村諸荒るを仍しく彼にいつも
江の家中のうしい意力あ應らい

定まりし折しも雲くもとうや
あにして梶乃音のしらへにいと
中為よりける嫋やかに手にしかと
きこえあひてうくるまとへのき
河てさとく世れにこしと花いもし
世にしれしるに河て光楽流

尚れは手波定ちのさうつゆの如き
ともし志をしきの乃尚て遊ひ
定河の森録もすものゝ
さうし波河さるの深浅下るへ
これひ乃ちは森るしかへ
中の清水すましれく花御

なもはしめまゐらせけれは
せうし志のみ乃ともかしこき
葉のしけさかも和哥のくは
あやしと錺磨の星乃さへ
兵かすくらゐはまれなりけり
ちかく勇推条乃志らく

学ふ路をもわすれやかくいひし
享和の二とせといふ年
長月花下旬之日

冨小路正三位貞直卿

勉亭主人志るす

吉澤文庫

播磨名所巡覧圖會巻之一目録

神武天皇
大物浦
琴浦明神
鳴尾崎
鷲林寺
廣田社
宿河原
芦屋洋
芦屋の里 同 あをぐり松
菟原住吉社
権現 神宮寺

雜喉場 渡海場
逆橋の松右衛門 浦の初しま
武庫川
松原山昌林寺
六甲山
西宮蛭子
阿保山親王寺
湯本の薬師 鷲尾山城趾 幸居稲荷社 西青木 田中 幸社 座待男社 大海神
住吉川

大仁村 野里村 佃村 雑波の里 同 梅
小松崎
幸寿丸の石塔 角の松原
甲山
同構社
阿保親王御廟 打出の宿
鵺塚 猿丸太夫旧栖
山路城趾
表筒男社 若宮八幡
灘乃浦

神崎 尼崎鎮城 長洲村 猪名
押照宮
感應寺
武庫山
御前沖
金津山
公光旧跡 菱葉ノ垣
同 湯
尼神社 立石
處女塚

新田義貞戦場
石屋川
東明處塚
摩耶山
處女塚
脇ノ濱
生田山
生田ノ浦
小竹ノ天神
多々部山
山路ノ古城
天王谷

御影ノ森
八幡社 二社
弓張ノ嶽
赤松円心古戦場
敏馬浦
法然松
生田池
生田神社
河原兄弟塚
大龍寺
安養寺
天王社

御影の社 葦ノ松原
舩寺
河内國魂神社
求女天王祠
敏馬神社
阿弥陀寺
生田 若菜 小野
城口標石
花熊城趾
古城趾
八ノ宮 二ノ宮
もろの瀧

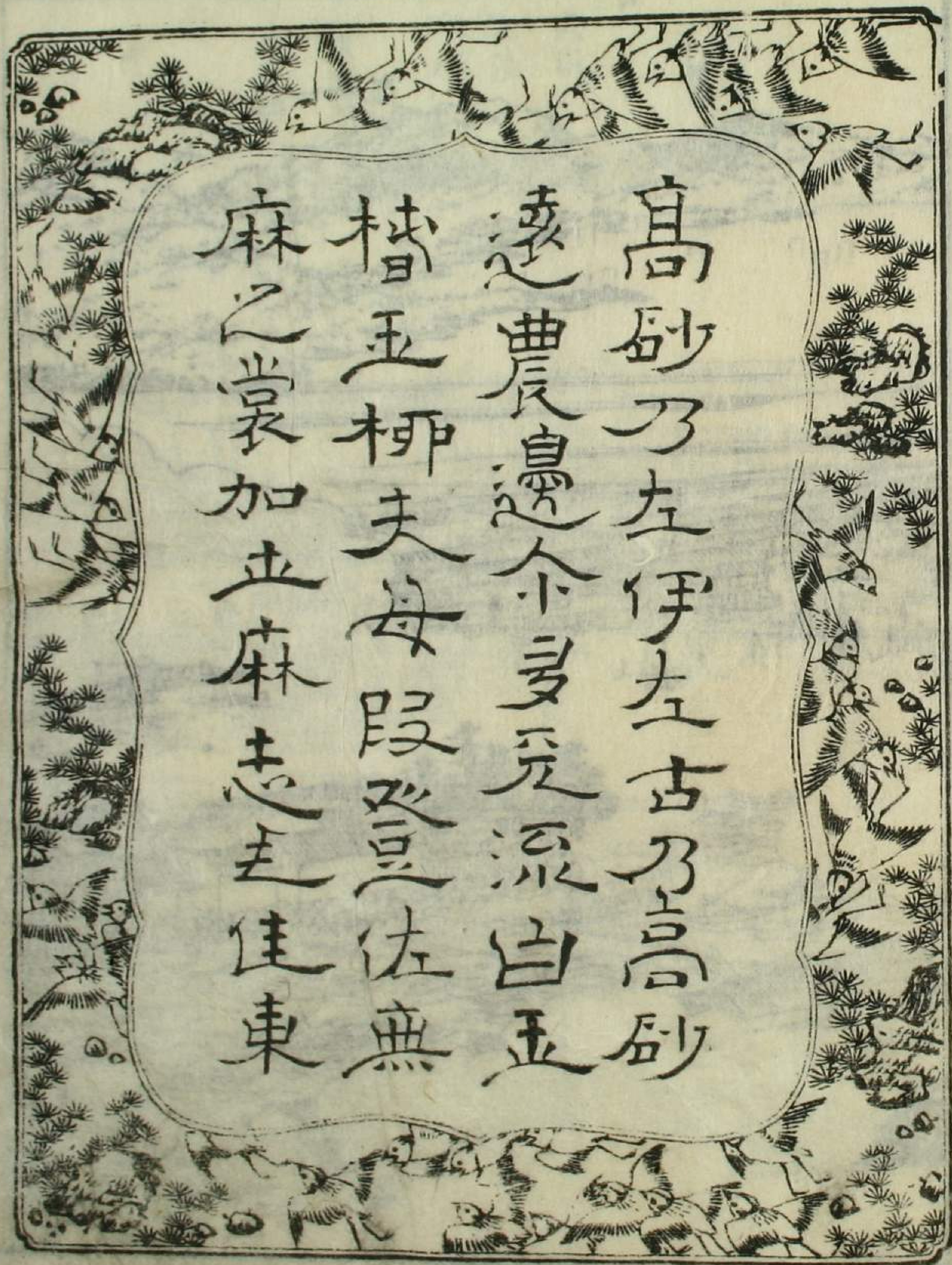
御影石
慶龍寺
焔魔堂
岡田庵
敏馬古関
生田 旧二ヶ所
生田川
堀原二度茶屋 二ツ茶屋 神戸 走水
三宮神祠
小屋場
雪見御所 古跡
温泉古墟

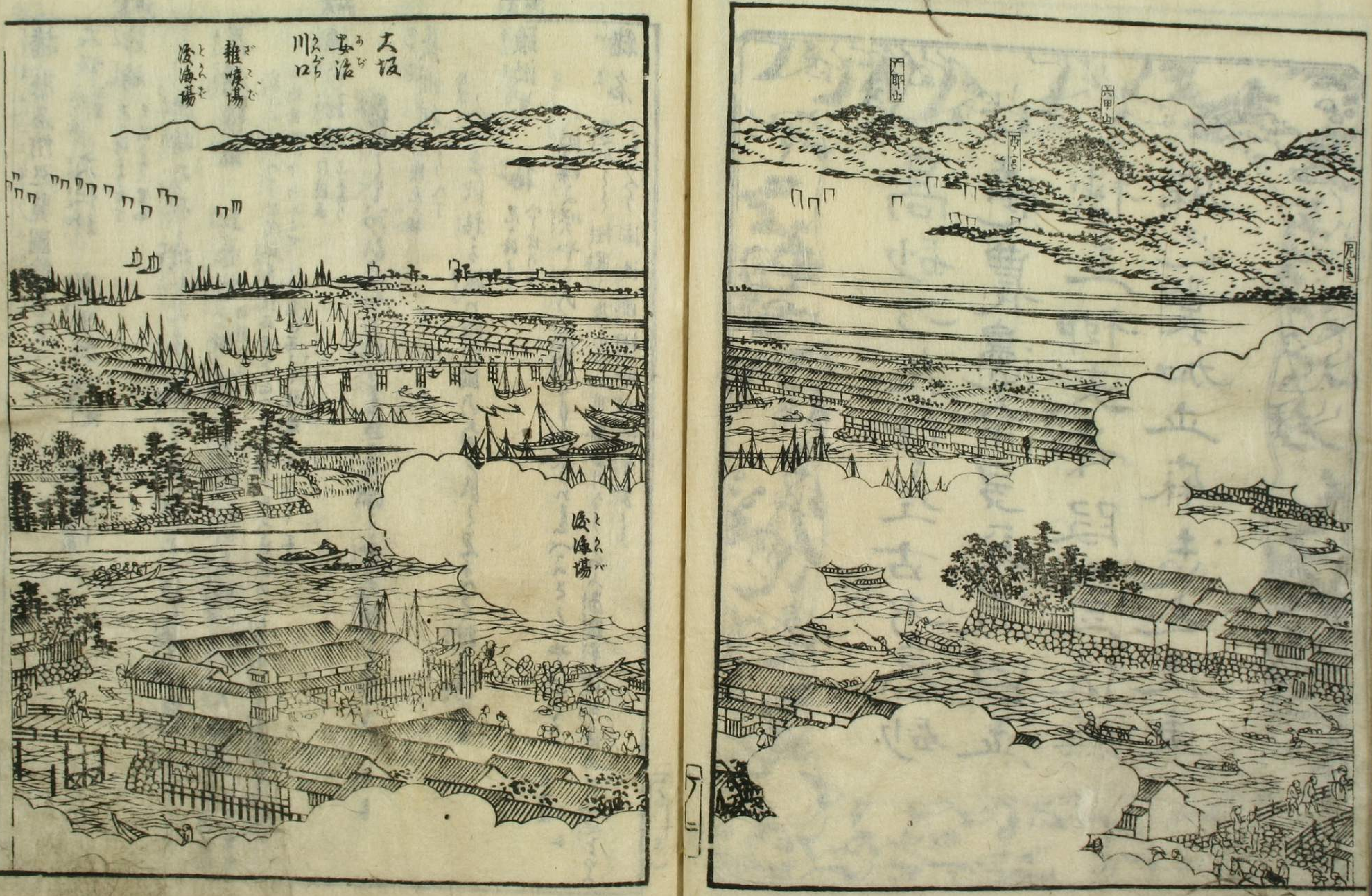
差方塚
湊川
鵯越
佐比江
能福寺
和田三ツ石
内裏跡
知章ノ墓
苅藻川

清盛山荘古跡
願成寺
會下山
経基墓
真福寺
燈籠堂古跡
福原舊都
監物太郎ノ墓

広厳寺
小寺桐箱の塔
神馬ノ祿
築島
論田ノ岬
本間宅矢濱
真野 真野浦 真野藻原
通盛墓

楠之碑 湊山
夢野 旧清水
兵庫ノ津
雁塚
和田神社
和田小松原
真野池 真野里 真野継橋
木村源吾墓


高砂乃左伊左古乃高砂
遠農邊尓多天流白玉
椿玉柳夫毋段登豈佐無
麻之裳加止麻志去佳東


大坂
安治川口
雑喉場
六甲山
西ノ宮

播磨名所巡覧圖絵巻之一

大坂 尼ヶ崎三里 大仁村 野里村 永渡し八丁程 佃村

江崎 尼ヶ崎より廿丁 天満より一里余

江崎のあたり磯も見えねば浪さらぬいつくより船はなるらし

尼崎鎮城 家の中にあり 此所は源義経西國下向の時纜を此所にて繫れしとぞ 大佐國畑へ下らんとせしとき此所にて城跡あり

船番所 入口渡し場の脇にあり

道橋松の古跡 町の内にあり

大物浦 尼ヶ崎の脇といふ大物町 又建武の比尊氏公御息所を供奉し

浦乃初島 日濱辰巳にあり

忍ねしも沖ひらかんものゝうきてハ添ぶさ霞の浦の初しま 皇后

長洲村 日浜尼ヶ崎より八丁

拾遺 人まちて待る流れの津の國のなにはと見えて袖ぞ朽ぬる

難波里 梅 尼ヶ崎より八丁戌の方

古今 難波津に咲やこの花冬ごもり今は春べとさくやこの花 百済國 王仁

猪名 遠川とも 往還に橋あり 此川猪名川とも云 當國豊嶋郡池田川へ流る もいふ 海渡 湊 沖 川 山崎 流るゝ歌多し

琴浦明神 東新田村浜城 天皇第十二の御子 を祀る

松風に浪の調る琴浦にかきならしつる絲なかりけり 仲正

武庫川

むこの浦できりしいさりする海士の釣舟波をたよりに 人丸

小松崎 鳴尾櫨き小松村の御旅所也 八松 留松 小松 此三ヶ所どいふなり

難波がたうら風さむし沼えれば小松がもとに千鳥鳴なり 勝明法師

押照宮 武庫川の西小松村より北新小社也 おしてるの名を号るなり

武庫行宮 日本紀に孝徳天皇大化三年春正月壬午朔日賀正禮畢天皇幸于難波碕宮 又云 羅山文集温湯記に武庫行宮は今の兵庫なりといへり 丘の庫郡の内に古宮と称するものは此行宮ならん 里人旅加々の宮と

鳴尾崎 鳴尾海 鳴尾浦 鳴尾沖 名をとよめる歌多し

峰 万葉 播花今盛なり難波の海をしてる宮にきこしめすなへ 家持

新続古今
今日こそハ都の方の山の端も見えず鳴尾の沖に出にき　実家

松原山昌林寺　津戸村にあり恵心僧都の開基なり

幸寿丸石塔　此所に多田満仲の御子びぢよ御弟子の家臣藤原仲光の伜幸寿丸の首を多田よりつとふて持来り此地にて葬るゆへ風俗と名付三月十日をば此所の祭りにするなりあはれも津門と書く

角松原　西の宮の町より二丁東

天乙女いさり燧火のかけ見えて津のゝ松がもとかゝるる

感應寺　神尾村にあり山号广尼山といふ始めは神呪寺といへる如意尼なる如意輪紀州高野弘法大師の仏浦法が堂と縁の内に納む旧記略して

鷲林寺　武庫の山内にあり山号は六甲山といふ天長十年弘法大師開基本尊十一面観音の霊仏なり天正年中信長公放火にあり蒼の縁と其後これをなりし大師彫刻の霊仏ありて御経及び宝物旧記悉く焼失して今僅に其形を残して村人見と守る

六甲山　武庫の儀きよりの菟原郡唐櫃村に至て皆武庫六甲の山内なり此山は仲哀天皇先后太仲姫の皇子かごさか王忍熊王天皇崩じ給ひて武内の宿祢をつかはし軍を起して兵と号し三韓降朝と皇后これを知り給ひて縁に出し皇居と悪む王及び大人の能臣と謀して此所に埋む其甲首をうづむ故に六甲山といふ

甲山　おなじく武庫六甲の内なり鷲林寺の奥にありて基は昆陽寺にあるなり昆陽の大池と通ずる其甲の形に似たり故に方日面向不背の山といふ甲の如し

武庫山　武庫郡とさせり菟原の西より御池かりも以

未木
ありま路や濃出くされば雲かゝるむこ山さくら今盛りなり　公朝

廣田社　西の宮より北廣田村南の方岡の上にありこれより三丁ばかり二十二社の内廣田八幡宮神功皇后の御事なり
又末社の祭神所謂一殿住吉　二殿八幡　三殿廣田　四殿南宮　五殿八祇　毎年七月七日御神事あり
此日神宝を出し諸人に拝ましむ八月十八日後の神事氏子の者を祭る当社とよめる歌

新続古今
今日までハかくて蓄へし津の国のかゝげを廣田の神にまかせん　左大臣

西ノ宮　摂州武庫郡之兵庫より五里此宮ハ西の御門なり
祭神一座　蛭子なる　世に不偏西ノ宮　相殿二座　天照大神
右左大己貴命　右事八十神　日本紀に曰伊弉諾伊弉冊尊の御子なりと云
神代記に曰第三の御子天照大神の御弟也三歳になるまで御脚立ざるゆへ天磐櫲樟船に乗せて順風に放棄給ふ此所に流れよらせ給ひしを漁する夷拾ひ奉りて崇ひかしづき後此西宮に祝ひ給ふを蛭児の宮と崇め奉れなりされば二神の第三男と当らせ給ふ夷三郎とや申とかや海と釣する神にあり給ふ父母のいかり表とそらん三とせに成りて足立ぬしして

阿保山親王寺　打出村の内にあり　○是も氏郡賀のと氏神駒林莵原郡住吉社

阿保親王御廟　右打出の上にあり

阿保親王〇仁和三年御子在原行平朝臣須磨に配流の時此廟を遷されたるよし　平城天皇第二乃皇子三品弾正尹贈一品

打出宮　兵庫より凡里余御影の東隣の一村なり

むかし神功皇后三韓征伐し給ひて築紫に帰り給ひ皇子生れ給ふ是即第三の御子八幡大菩薩応神天皇是なり于時第一の皇子麛坂第二忍熊皇子など悪みて此浜に集めて船を待ち皇后を組ましたまひて南海を巡り帰洛し給ふとなり皇子の軍卒打出るとて打出乃浜の名ありとぞ歌名所打出乃浜をもと遊ばれたり

金津山　打出村の西人家の岡山なり阿保親王此岡山に御むかひて金の犬を埋させ此里飢渇に及びけん時是を掘て用ゆべしと聞えしが中にある時むかしより三十一字よみて是を掘んとせし者あり金の尾一万黄金一千両の朝日サス入日輝コノ下ニ金千両漆万杯　上云

又源氏物かたりあかしの巻に

まづ河海乃あるじなる蛭の子の足立ざりし年は経ぬらん

攝社　名次社　鞆津社　岡田社　須川御前社

沖夷社は西宮の外田圃の中にあり

毎年正月九日神拝あり蛭子広田の社に参詣の夷窓相乃見ゆる悪しきを払ひて人倫のこゝろを祓ひ給ふの故とて民村門戸を閉て外へ出ず居籠の事とて諸家門戸を閉ひて社家は此世俗十日夷祭の宵より門松を逆にたてるなり此里の風俗也○此所ある氏神広田の御相殿の神に祈ひて高売の賑ひあり又

○推古天皇九年三月聖徳太子はじめて売買の市を立て新田義貞陣所とも蛭子の神に祈ひて商人等此神を崇め奉る此神より今に諸商人崇め奉る此神に祈りてはじまる

拾玉

西の海に風ふかせよあしのやのみや東のみやゑびすを三郎　慈鎮

廣田歌合

ゑびすさへ神にも東ぶりけるもろもろの表まで　執政

御前沖　西宮の浜蛭児の海をいふ此所は神功皇后三韓を平げ給ひて御帰朝ありし時乗らせ給ひし津国の海浜の小嶋広田の郷に御船を着せ給ふ又異国御退治の兵具を此地に埋ませ給ふ其海辺を御前沖あまへの浜ともいふ武庫郡と号く神功皇后の記に見へたり

千載

あるじとわかまへの沖を見渡せば雲井にまがふあまの釣船　兼実

宮河原　西宮より一丁余西にあり旧名海下郡　むかし摂津九郎の寺院ありて本佛を宮河原といへり

つまらへ〳〵る〳〵

○建武年中船山阿波守園湯湯乃山手より山城に出る陣所なり

芦屋洋　月浦　月漢　他歌多し略く

新古今　あしのやの灘の塩やき暇なみつけの小櫛もさゝれきにけり　業平

湯元薬師　月不三条村にあり塩通山の中有馬の温泉の塩ハ湧出す昔行基南海より此芦屋の浦に引通ふらんひらしかる馬温泉山の湯坊
月並素絶して此なる像を拝み後世伽藍破壊して
今ハ堂もとるりてむ此のたのき湯元の松とゆふ　○鷹尾山城址

鵺塚　芦屋川の東御石のもとにあり
近衛院の御源三位頼政矢をもて射落されし
化鳥は舟に入れて西海に流れ此芦屋の浦によりて
止まる浦人是を見て哀みて埋むといへ

猿丸大夫公光旧栖

茨田屋敷　吉道村の内にあり　若芦屋の里及び近郷七百余町の領主藤左
衛門尉病の床に臥して一子月若を伯父茨田が猶子となしく
相続の事を遺言して終に卒る茨田是を継いで遺跡悉く横領
せり因て月若孤独の身となりて光明寺へ入る時板公諸国を
巡りて貪狼放逸の職徒を禁じむ依て月若是を訴へ茨田と

糺問して其邪を改めて本領をかへし給ひとぞ

業平朝臣仮居古跡　此芦屋の里ハ業平御知地なりし故に業平卿も時々経歴の事あり
晴る夜の星か川辺の蛍かも我住む方の海士の焼く火か　業平

葦屋里　御石の北山路の村々　なしやり
横折道　かの中と我住方ハ雲てみて芦やのさとに秋風ぞ吹く　定家

月躍松　森の東村西なる道にあり其此辺その森村の稲荷森撰ともいふ人かりをあまへし所なるといふ

本庄稲荷社　森村にあり　昔此神幣源江村の海辺に流れ止る
森村の民家に入り備前村民睦しき祥とるせり
し麦を以干乾て民舎祥を擁へ見ぞり神を迎へ森村
に社を建て本庄の庄中氏神と崇め祭る　毎年正月卯日汁拝あり

西青木　田中　此道村の他の庄にして此後海近く湖と潟と湯とれ
詞花集　秋の部書に出せり
接摩守に侍りける時三月許に京よりまうてなる人の参りてかへりけるに
なかなかに都のさくらも咲ぬらん我も何故いそく出けむ　平忠盛

山路殿跡 片町より西山の方田の中に祠あり 山本赤松 宮浦(?)桃宮表次郎則実の城の跡なり 月湯

菟原郡 東の方甲(?)より西ハ生田川 南ハ海中に限りありて 北ハ山中にあり 伊勢物語にいへる芦やの里これなり

菟原住吉祠 住吉村にあり 延喜式 西の方 其所これを摂す 守て山路の荘といふ ○社領画上にあり 御旅 田中 片町 住吉 横屋 魚崎

祭神四座 天照大神 八幡宮 神功皇后 住吉 摂社 末社 諏訪 恵日

住吉表筒男中筒男底筒男の三神ハ神功皇后三韓を伐せ給ふ時の軍に従ひし御神にて御帰陣の時皇后に誨へて荒魂を長門国山田にまつらしめて明年豊浦宮に移し給へりそれより海辺二十二社を勧請し給ふ其ハ一ツなり又大坂乃南にまつりしハ和魂なりとぞ

○境内に 釣殿石 大海神祠 神宮寺旧跡 若宮八幡 御旅所 等の名あり

○此村むかしより摩耶山の道ありて五十丁斗也 ○八幡 ○若林氏実 安楽村 ○五毛天神 等 蟷螂堂 など其の間にあり

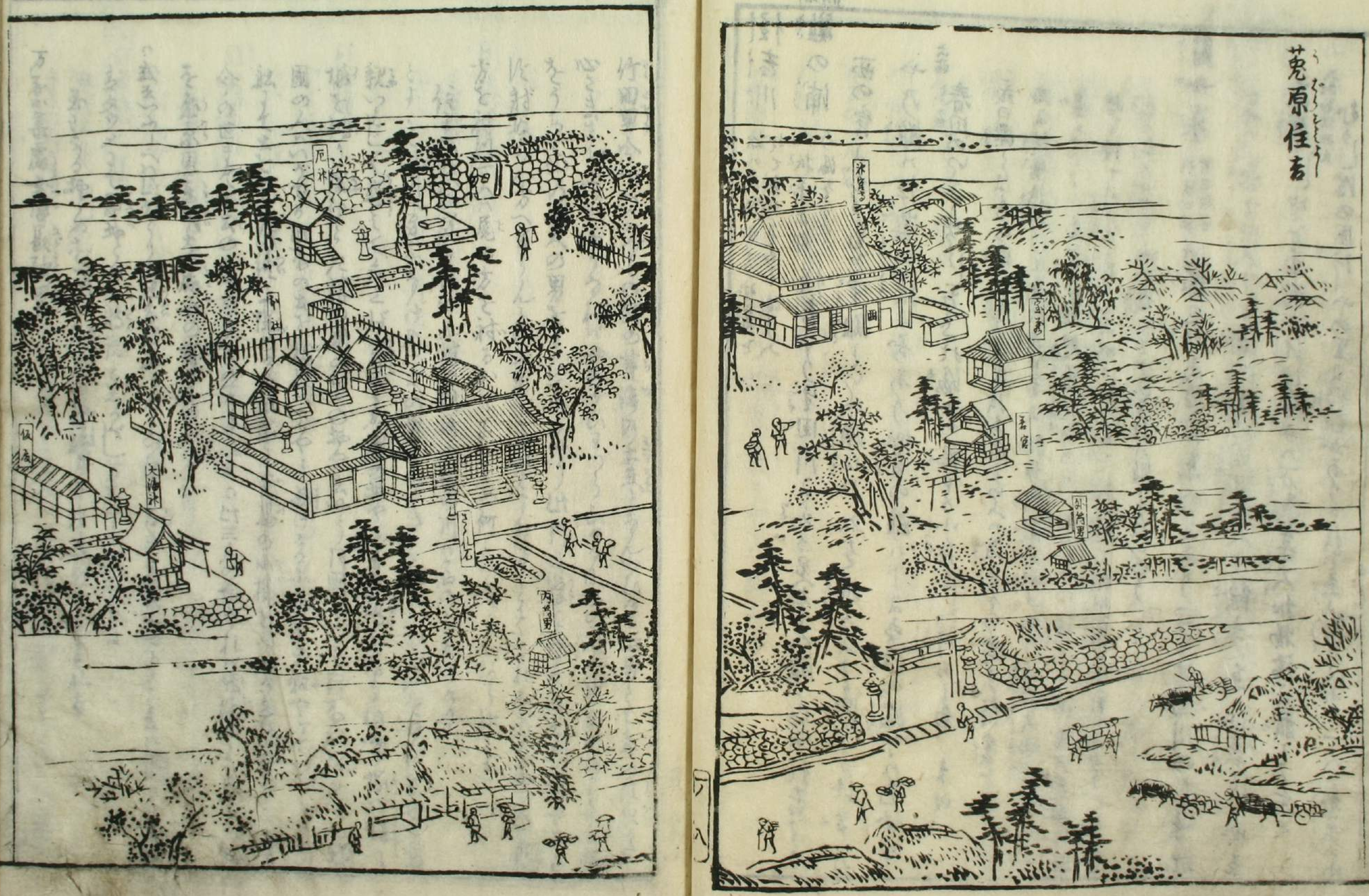
住吉川 源ハ武庫山より出て住吉を経て魚崎にて海に入

灘の浦 大抵菟原郡の海をいふ 住吉より生田川に至る里を大灘といふ 住吉より西の宮に至る里を中灘といふ 浦口ハ船を泊るによろし 芦やの灘ハ伊勢物語にあり 郷音の灘ハ下に出る 波の瀧千ハ名所かな

六帖 春風のいたく吹らしあまの海士の綱たる小舟さし帰る也 素性

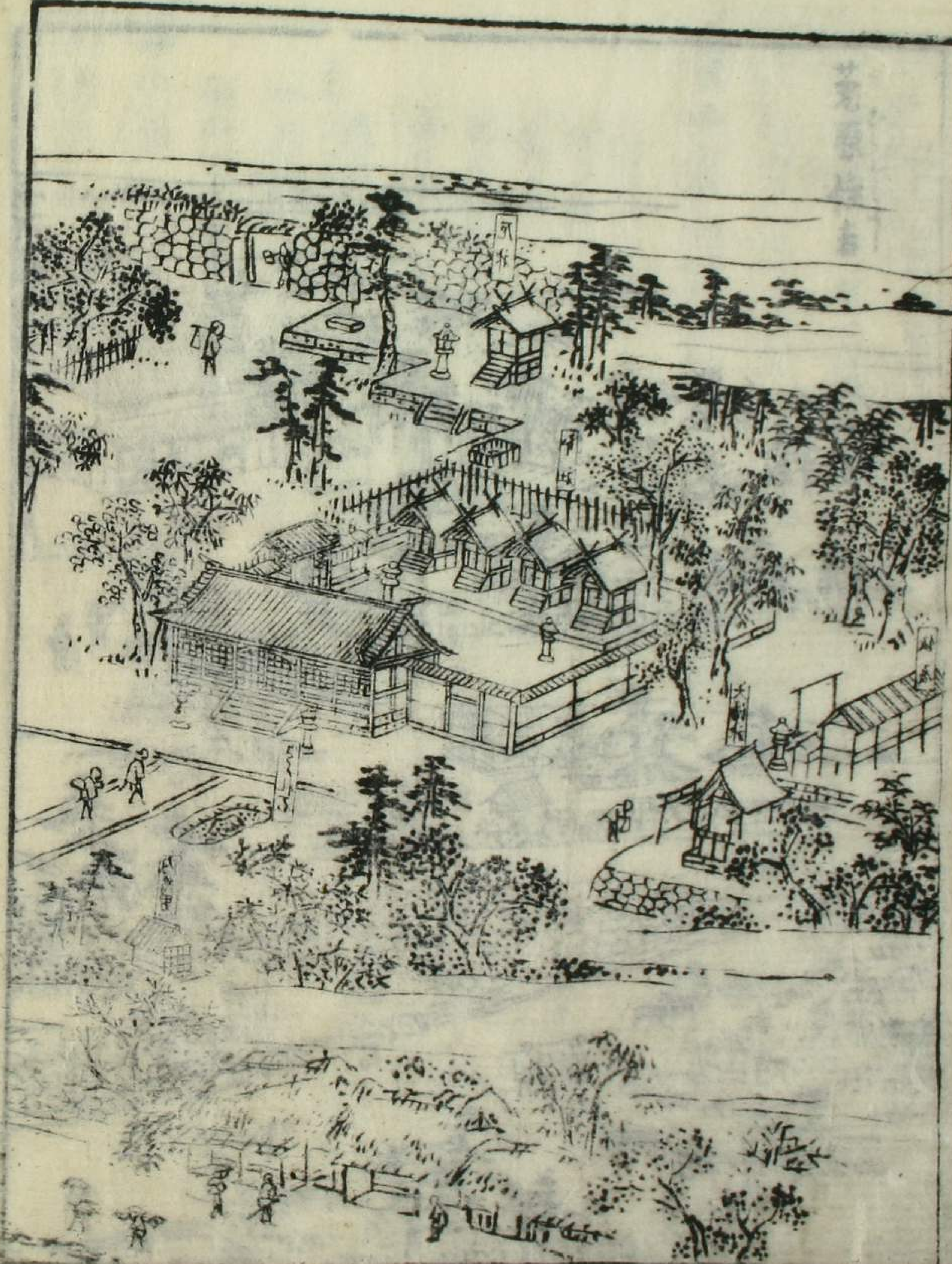
○或日灘とハ海の端にて水き所をいふ 浅き事をいふ也これが実と灘 西に淡路島ありて東ハ川口南に紀伊阿波乃鳴戸あり尼崎大物鳴尾芦や 摩などより南をさせば淡路紀伊の間トモガシマの二海より淡路の南浦乃間を経て鳴戸にまつる又鳴戸乃南を経ぬけて紀州浦の西南をめぐりて来る など皆潮水の聚るをもいふれが灘といへり

處女墓 住吉の西 御田村にあり 此塚三ツあり一ハ東明にあり一ツハ生田川の東味泥にあり各十町又丁を隔つ 塚の周囲各八十余歩 東ハ西表とし西ハ東面とし中を南面とし此故に一万葉集大和物語に載る所 大和物語ニ曰 むかし津の国にしやの里に住む女ありこれを恋ふ男二人あり一人ハ菟原の



莵原住吉
若宮

竹田男今一人ハその國の茅渟の壮士よろしかりけり此男ども年のよはひかほかたち
心さまもおなじほどなりけれバ女おもひわづらひて身ハ一人なり女の親や生田川のほとりに幄
をうちてかの二人の男をよびていふやう此川に浮て侍るみづとりを射あてたまへる
に射ぬらん方へまいらんといふ男どもいとよき事なりといひて射るに一人ハ頭の
方を射つ一人ハ尾の方を射るかくてむすめ何といふべくもなくわびしく
住わびぬ我身なげてん津の國の生田の川ハ名のミなりけり
とよミて此川へ身をなげぬ二人の男もつゞきて同じ所へ身をなげ果ぬ其女の親
親いミじく悲しくておもひあげ葬せむとす男の親どもも聞つけて来り此女が塚の傍に
塚を作り埋むこれ津の國の男の親や云やう同國とこそ同所に塚をつくるべき
國の人なれバ此所の土を犯べきやと妨げけるに和泉の親やかぞへがたしとて
船にて土をはこび終に埋めける此塚に葉揚の小櫛をうめたまはせつゝあり
今の世までも其のこりてありけり云○此三人の塚すなハち味泥にあり
を菟原男東明を處女の塚といふ
○或云一ハ此辺りの地名なり一といひて古き所ハモトメヅカ云ハ求塚
もタウメヅカ即ち一の説なるべし万葉人丸の歌に
玉もうる時をとりて求来の塚がたしよりもまれぞ
万葉集處女塚長歌略



ふるき代にかはりつゝんと思へる墓中に遣り捨きおもしこ堀かへるこゝろにこの道かけるゆへはしまでまゐらねども新喪のことも添なきつゝぶ

同反歌二首

いにしへのやのかゝるひおもしめが思ふつきとゆきぬされば後のよしかく
つかのへ本の枝ひだりきくやでしぢぬ男はしらるべかりしも

同 芦屋處女墓とよめる浦乃長歌略書

いにしへのますらをのおきかひづまどひしてたんかしのやのかゝるひおもしろの野さつきと君うちこれいみがきせのかはりはしつゝ 下略

同反歌

いにしへのさ田男のつまどひしうなひおもしろの墓さんぎやうた

此三ツの墓のうへ義物志には三陵と号して太馬猿封之此皆上古の荒陵なるを穢宿文人俚諺を捨りて遠棲の文藻をみせりとなり

新田義貞戦場

楠正成討れにたれば新田足利の国争ひ今を限りとぞ見へたる比一万余騎を三手にわかち三方より義貞を討てとる義貞わづか御方の軍勢を落延させんため後陣に引さがり返合せ戦はれたりけるに義貞の乗られる馬矢七筋まで立たるる小膝をおりて倒れる義貞求塚のよこにおち立て乗替の馬を待給へども御方に是を見る者なし敵是を見付て討んとするに義貞が乗替に捨場して近くいまだは十方より遠矢の射かくる矢は雨や霰の降よりも尚繁し義貞は太刀二振左右の手に持てきかる矢を薙払ひよける矢はなさしうちふき正中に射たる矢をば二振の太刀を以て上へまでぞ切て落されたる其ありさまは天王乃放つ矢を返膝匙の手て返るらんもかくやと見えたる斗に小山田太郎高家遙の山の上より是を見て諸鐙を合せ馳来り己が馬に義貞を乗せまいらせ我身は徒立に成て追かくる敵を禦ぎたる小勢多の敵に立籠られて終に討れてたり其間に義貞は虎口を逃延給へる敵が義貞に留って討死をとげける事義貞西国の討手を受給ひ時播磨に下着の時軍法に田畑のものは一粒も刈る民家追捕などとする者あれば高家軍中の粮一粒もなかりければ止事をえずにまかせ麦を乗鞍に深せて帰りたり御の侍是を見て誅せんとられし義貞にこれが法を犯しは戦ひの為に恥をわすれる事なかしとて田のぬしには小袖二重を添えにて粮十石を副てきいさる高家其情に感じて終に大将の命にかはり戦ひしとなる所でこれをあはれまざらんや

御影森 石屋村の東にあり　御影社 林中にあり　○雀松原

横言に ミかげのきの門を

たちよらば御影の松と宿まへて花にしたちとせよまきて老ん　基俊

御影石（みかげいし） 兵庫莵原の二郎の山谷より出て村用の上品とし下海道の御影村石工あまた器物に制し積出す故に御影石といへり今石の出る所と御影とは一里へだつといへども古名なり あるひは西周寺殿の御影といふへは播州加賀あたりを採りしといふて其名不分明なり 先此山は海岸ちかく近し又磯も浅く理に石をも山に出して奥深く左右に石や村より車に牛をつけて御影に出せり○石宝殿の因要石といふは大雨の時石屋川へ流れ出るものにて石に積売て悉く丸し

石屋川（いしやがは） 一名徳井川 源は武庫山より徳井を経て東明村より海へ入 **八幡社**（やはたのやしろ） 二社あり一ツは八幡村にあり天正廿年後華氏一ツは河原村にあり一ツは深田村にありて舟寺八幡といふ

舟寺（ふなでら） 一名神宮寺 八幡の傍にあり 文明の頃の古寺なり

類林和歌集 舟寺に宿の者をし侍よむ歌を

これまでのりおくばしと舟寺のみ夢と宿りかげてうらまつらん 住也

慶龍寺（けいりうじ） 篠原村の上にあり摩耶天上寺の末派たる文明の古記に見えて其旧く在る所なり 寺の由緒つまびらかならず此寺の奥原の旧田より出て元亨の書に見へたるなき由緒なり

東明處女墓（とうみやうをとめづか） これより東ら塚あり それとぞいへり

△弓弦羽嶽（ゆづるはのだけ） 東明村の北にあり ある人云弁ゆづりは嶽といひこゝより三ツの峰あり はぢ山も右の西向きを高けしのとて是より強て浮田にも宝を此寺は名の古跡なり

大石川（おほいしがは） 一名都賀川 源は武庫の山谷より出て川原森村大石を経て海に入 川の西大石村海浜にあり

河内國魂神社（かうちくにたまのやしろ） 胡麻生村にあり式内の大社なり今は天神といふ上野の加茂藤森とも云ふこれより摩耶の谷に至る 忉魔堂へ二三丁計

忉魔堂（えんまどう） 上野村にあり摩耶山へ十八丁 海道川原西より又岩屋村より入りてあり十八丁

△佛母摩耶山忉利天上寺（ぶつもまやさんとうりてんじやうじ） 上野村忉魔堂より十八丁 仏石三ツあり七まがりを経て二王門に至る門外の石階七段都合二百十級なりて其上に至る 本堂は山頂にあり播州一望の内にあり大海を見おろし海辺は続のごとく村里は一握の粟のごとくのぞめり **當山の開基は天竺法道仙人**にて古義の真言法道は元亨釈書神仙の部にありて空大師（ぐ）宮薩桐疑（?）久米仙人都良香等と連綿たる仙人の始なり 尚法華山の条に見えたる ○釈迦切利天へのぼりせ給ひし義をもつて忉利天上寺と号け佛の母摩耶夫人を安置せし故に佛母摩耶山といふ

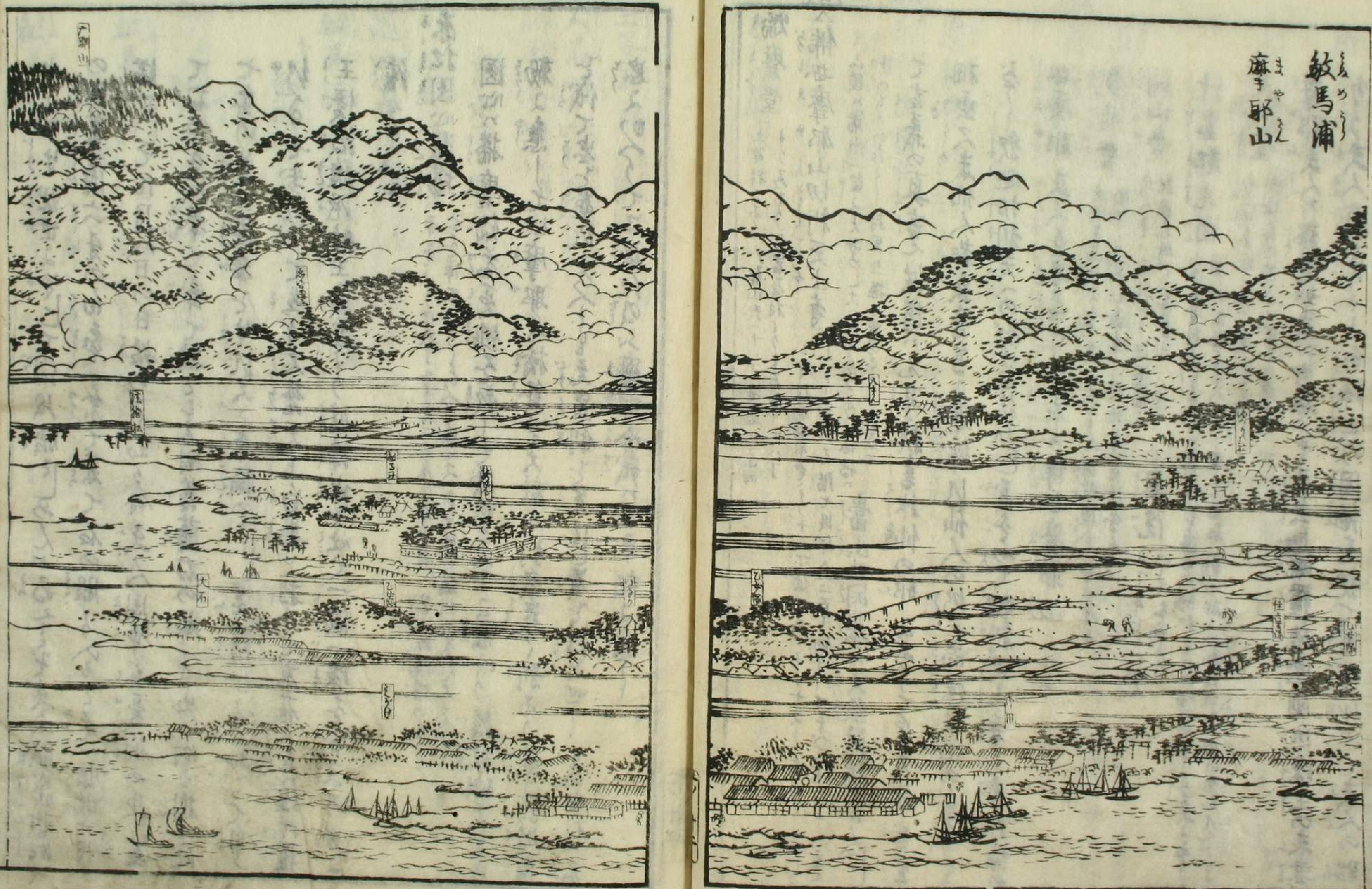
觀音堂（くわんおんどう） 夫人堂の左にあり長一寸二分ありて圓院極全三寸の像を胎中に籠む每年二月初午の日法會あり

開山堂（かいさんどう） 夫人堂の右にあり法道仙人弘法大師を安置す ○**奥院**（おくのゐん） 又丁斗登る之女人は登る事を禁ず

什宝都九面（じふはうとくめん） 山下上野村帝王寺にあり 家にあり之を高らに納む表日の鏡一面は金色あり 一面は丹波楠木久米が刻む帝王の名都の後に出動し而是の時山面あれど文

○夫人堂（ぶにんどう） 山上の南面にあり長一寸五分 釈迦右の脇より誕生の像あり

摩耶夫人は釈迦如来の御母にて天竺迦毘羅施兜國白淨王の夫妻なり夫人真正なると白淨王の因縁を知て菩薩化して夫人の胎



敏馬浦（みぬめうら）
摩耶山（まやさん）

中に下生現世に生じて俗に瞎さしめんがためとぞ又夫人眠寤皆時の間菩薩六牙の白象に乗て来て右の脇より入ると見へ懐胎十月満足して二月八日の日始めて出る時夫人園中無憂樹の下に立て右の手を挙て傘て摘とする時菩薩右の脇より出る時に樹下に七宝の茎の蓮華を生じ大さ車輪のごとし菩薩は上に御立て自ら行事七歩にして立り大梵天王白拂をおして左右に立ば難陀羅王優波難陀龍王虚空より清浄水を吐て一温一涼を太子の身に灌ぐと云

赤松円心戦場　平井より北へ丁あまりて二の尾のある谷、宝篋塔の立る所なり円心又一れの後は播州の本に兄るべし

円心は播磨佐用郡の英雄を以して威勢天下に振ふ後醍醐天皇の勅に応じて此摩耶に楯籠て大敵を引受て悉く利あり遂に六波羅を伐て忠を盡れとも元来利を先とし義を後とせしものなれば不忠にかへりて子孫に及ぶ摩耶合戦は太平記に委し

王子神祠　東田村にあり文明の社記ありといふ

牛頭天王祠　うちや村にあり文明の社記あり

大石村　大石川の西の海浜此辺漁家多し

円因庵　うちや村にあり　庵に元亀三年の日記あり又法華経あり其跋に曰く

応永二十一年中元の日功畢ぬ貞和三年丁亥月廿六日東山の朴庵に書写す

に接く康永三年二月中旬正六位縫殿正忠原朝臣師範施入

処女墓　味泥村にあり三墓の一つなりといふ

敏馬浦　石屋村服浜八田部の海浜に亘れり

万葉　玉もかるみぬめをすぎて夏草の野島がさきに舟ちかづきぬ

野島は淡路にありて此浦に向ふての歌拾遺集に敏馬をとしまとせり浜は浜にも名あり　敏の字と通ぜ

新続古今　みぬめにし里のあるべし向ひてみぬめのよそに人ぞ波かる　定家

敏馬神社　岩屋村の林中にあり松林此に灌ぐ今三社と称し岩屋大石味泥の氏神

延喜式八田部郡汶売神社とあるは此社なり摂津国敏馬山にいませしを神功皇后船を造りて功ありしは此神の加護なりとて此ところにうつまつるといへり

敏馬故関　山岩屋村にあり　此関摂津志に従ひて爰に古歌あるをもつて記す始めて

てふ名を考ふるに関ハむかし國境にありて生る故事かし入る所に關ある古歌
に須磨の関をよまれり今も是國界にてよく當れり播磨とよいふかへの
國界にてありしか尚考ふべし　和名抄菟原の郡に橘壓國大和田の海とみえ
兵庫のあたりや今古國界浴草も多きりのあれバ是須磨の関よりおきもさして

脇濱　岩屋村の西にあり　此邊五六ケ村名産多し　酒　茶　菓　又水車多くして擣舂
秋節蚕業を家捨ス水源まき所には筧をもてこれを引き長くまわりて人屋の
上に並びて其下を往来するも又興あり山手の水車新田には多く池を

法然松　脇濱にあり法然上人左遷の府風待などの跡なるべし

○阿彌陀寺　同村にあり法然上人配流の府やどらせ給ふ旧蹟とぞ

生田　生田ハ郷名にて其中の生田川といふ　**生田二宮**　葺屋荘六村これをまもり河流　川の東にあり生田明神八社の内

生田小野　百畝一名生田池　續後百首　衡ふの左右山もおつるハ今小野坂も生田の池を主繁ぎ乃猿そやさむき社の秋の野　家隆
生田池　生田村　廣さ三
續後百首　猿人の石きまさげに摘ものの生田の小野の若菜なり　師兼

中尾村の人毎年生田の濱乃海藻を採て京師に献ぜられを生田の若菜と云
武日第三集環草とよむ是先蘭之摂津志にいくとの其一と定ふかし法りなり

生田川　森より東御影の川なり源ハ布引の瀧より生田の社の東北を経て郡界となりて海に入る
新拾遺集　名も見ひぬらぬのまをらしなくも生田の川ふ名をやすらくし　通經

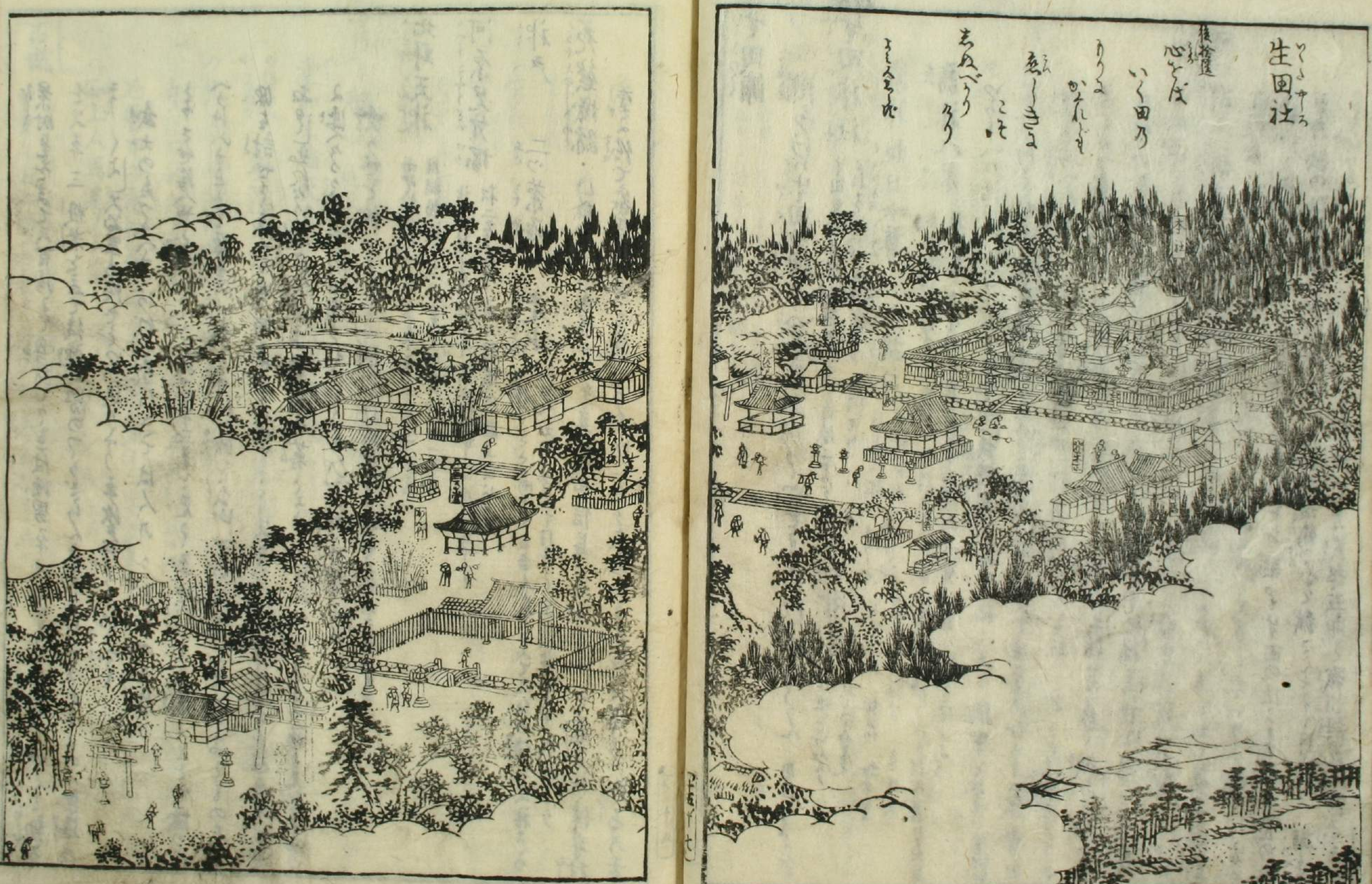
生田山　生田宮村の上方にあり一名大鏡宝山　山中に瀧あり甚だ涼なり

生田浦
古撰　風ふけば生田の浦のいくたびかかる心をまたに見んとすらん　内侍藤子

生田神社　生田宮村にあり式内の大社近隣二十ヶ村これを氏神とす　七月三十日　八月廿日　**生田森**　社地をいふ　いくたのもりとよむ
祭神　稚日女尊　○**摂社**　住吉　八幡　諏訪　日吉　**末社**　天照太神　稲荷　雷大臣　蛭子　弁才天　加茂宮
裔神八社　この城外にあり一の宮ハ小野村にあり二宮ハ生田村三宮ハ神戸村四宮ハ村又宮ハ宇治村七宮ハ兵庫小濱町六宮八宮ハ坂本村にあり

いかしへハ活田川のふもとにありて生田長狭国と称し海上より狭茅を採ひ者臣
ありよりて今も村長海上氏とありて社家の神事を供ぜむかし祭禮を
和田の御崎へ守まりしてとなり ○式日廿一代集に此宮を社又は神とも詠ぜらる
さしてその即社のあたりて社の宮の論あり ○祠前に浅茅甚だ長く波打際に至る
若焼きを建より森より先まで大抵凡丁餘皆八重の桜若枝を接へ花の盛り
かは波の花打かうろをひきたれ海浜のかざしに似たり春光異所ふは勝れり

城口標石　**梶原二度懸**　生田の三町丁西　城ケ村の西　平家生田森の標に平家ハ八湯を出て福原の旧里
に陣居し西ハ一谷を城郭にかまへ東ハ生田の森を大手と定めたり源氏の方ハ
義經を始めとし三萬余の蔵を手家をおそひも生田の社に来へ進み寄の松
原御影の松風陽の方に陣去して一谷の後鴨越を越さんとかかり丹波より攀へ
こそ向かふ又上生田の先陣ハ川原太郎兄弟高郎五郎と戦ひ討死す梶原平三


生田社（いくたのやしろ）
後拾遺
心をば
いく田乃もりに
かくれども
恋しきにこそ
志ぬべかりけり
よミ人志らず

景時是を見て又百騎にて與ひてかゝりしかば源太平次あまりに先をかけんと勤る
を父平三 見て 使者を立て後陣の勢のつゞかざらんに先かけ するんぞ ものは勤進すべ
まじくよし大将軍の仰せとて追ひとゞめよと平次とて引かへしくひかへく
武士の先つゞきあらば引き返しては人のかたへともものかは
と申させ給へやと申しかれて平三見て平次討たるゝ者どもとて城の内
へかけ入りしども源太のゆくへのしれがたきみえし先がけせんとて入にけるものなれども
源太を討せじと平三が命何かせんへせやとかくのえてかくし終に源太が命を見て
おちし出たり梅こそ梶原が二度の懸とぞ申すなり又咲乱たる梅が枝をさし
て源太が箙に花の数々れどもかわひぞ袖に移りたる
咲くせを何ひとひまん梅の花数来りあぞ香はまされたる

北野天神 中宮村にあり治承年中又条大納言国綱勧請ありしと生田裔神の一つなり

河原阿弥陀塚 神戸村より三丁斗東畠の中に塚の古し松二本ありこれ戦場の画上にたり

神戸 **二ッ茶屋** **走水** 三村つゞきたる所にて大きなる人家建並べて大社の傍らなる神戸を カウベ カンベ とも同じく書くは神社の御供地なり

花熊城跡 此城のありし永禄十丁卯年織田信長公の御法として荒木摂津守村重に仰せて家臣池田与一兵衛を守将として一ヶ年の内に城築きれ其後三の上

又北の口とも二方之搦手は西の口之元亀元年荒木志摩守村正これを預り天正三年まで居城し志摩守子細ありて藝州毛利家へ加わりしより又与一兵衛一ヶ年此居城けり此間に大坂門跡籠城のなりに付西国の門徒等より兵粮運送せる事信長公堤口に仰せて是を防ぐ此軍しばく堤口へ討手を後紀州の一揆雑賀党市根来の浪辺衆花隈門此城に籠りて旅々之を池田信輝入道勝入向ひて合戦を終天正八年七月二日に落城し今に其跡存れ

三宮神祠 かうべ村にあり村中の生神とれ生田八幡の内なり

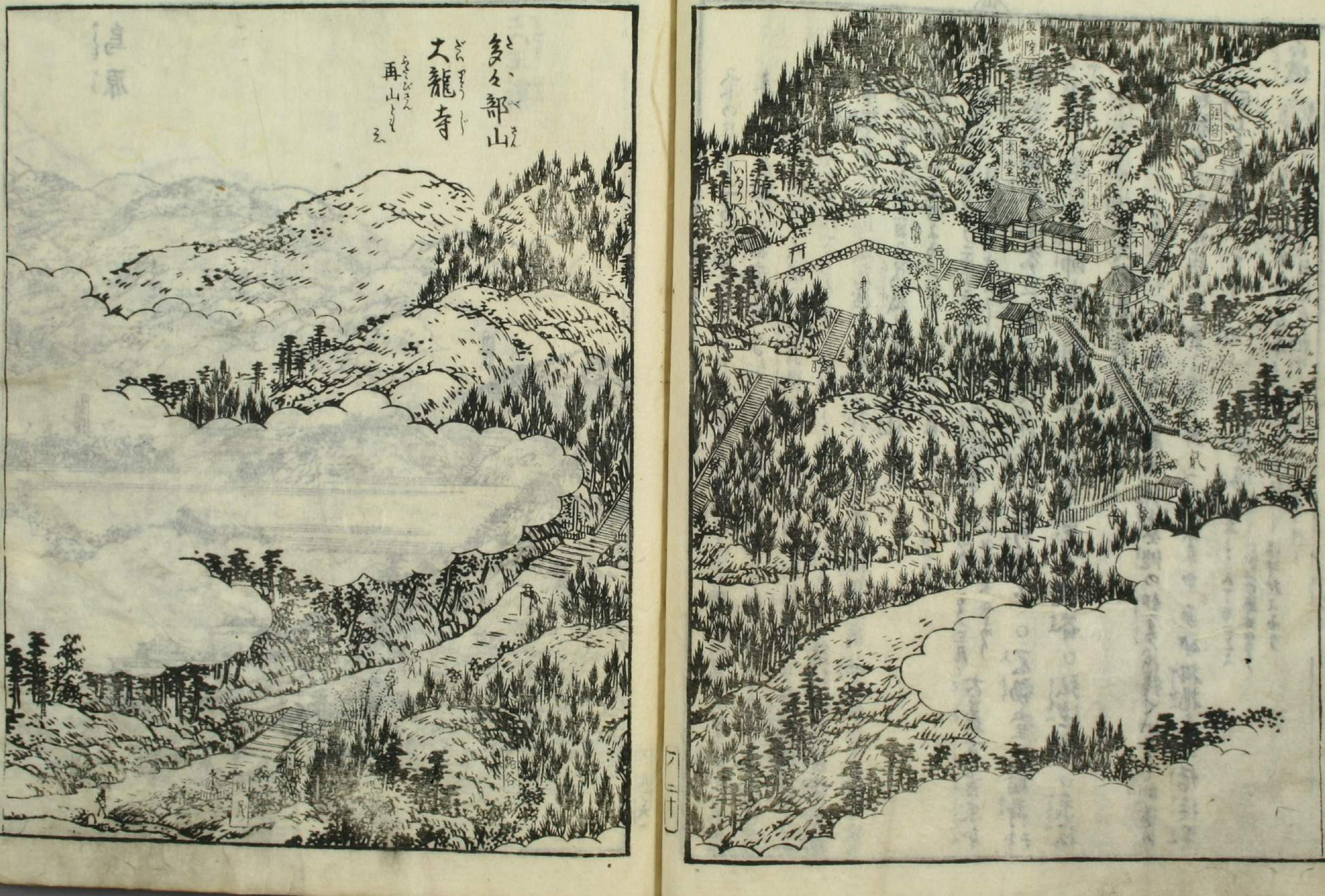
多々部山 街道より二十丁斗山高険絶景いふ方なし **大龍寺** 右山中にあり三月十八日観音会あり **古義真言宗本**

堂如意輪観音菩薩立二尊不動毘沙門 ○行者堂 ○不動堂 ○稲荷社の仁王石 ○奥院大師堂 ○閼伽井 ○梵字岩 ○蝿谷 ○弘法滝 ○糸揉山にあり

の瀧等古き弘法大師奇異の小説あり

○寺記曰称徳景雲二年和気清麻呂行基作の観音を得て此寺を創造し延暦中の年弘法大師家に籠を掛く○寛文年中南都招提寺の僧徒覚正上人再建して今に及ぶ ○**小屋場** 街道より入丁目の上にあり赤松の陣営なり

古城 まの〻部盛中宮村にあり五字峯より小え〻たる城に守る須磨村にあり観応中赤松範資信濃守範資則実口へ打出て城を構る


多々部山
大龍寺
再山とも云
奥院
本堂
不動
方丈

天王渓
牛頭天王

烏原
氷室明神

山路古城 中宮村にあり 土井三郎貞兼が古跡 ○**大照山安養寺** 坂本村にあり 御本尊ハ尾崎ときこえし鉄笠山大福寺の三の菩提所なり 今ハ堂内に三の塔あり

八宮六宮 坂本村にあり 生田雨林八本の内也 村中にこれを祭る

六宮ハ本の外と称し 例年祭事あり

雪見御所古跡 奥平野村にあり 福原の都のころ也 清盛こゝに造るといへり

天王渓天王社 奥平野村にあり 此辺りを天王谷といふて丹生の山田より兵庫への近道也

まこと都への道がゝりの険なるものあれども布引の滝より行く路あり

千鳥瀧 みなと川の上石井村にあり 又馬とも名づく

祇中村

石もちかはるの流によりてこれが藤紗人の名にとはあえず

温泉古墟 石井村にあり 此地名残ありしもの 兵庫の民家にあり

義方塚 荒田村にあり 塚三株の木あり

平家物語曰 治承四年六月九日新都の事始として上卿には徳大寺左大将實定卿 御殿人和田の松原西の野を點撿して九重の地を割りけるに一条より下五条まで其の地ありて 五条よりはならざりければ 行事官かへり参りて此由を奏す されば播磨の印南野か 摂津国の昆陽野かなどと公卿僉議ありしが ことゆかず 広路を開いて十二の通門をたてと見えたり 況や五条までなりし都になどか内裏をたてざらんとて 郷一日に中宮を造りたりと云ふ 平相国不残なりぞうらんきこえけると云

平頼盛山荘古跡 荒田村にあり

清盛の弟池大納言頼盛の山荘なりとかや

源通親治承四年三月高倉上皇厳島御幸の記にいへらく

又同四月ふたりしかばたうさぎ此御所にてつかせ給ふ 都人の心ぐるしさは何かはとよく上下の思ふ中の所に福原に宿らせ給ひぬ 今一日も都へとこゝろ心の内にはおもひ給ふ福原の中御所にて御楽ありて 家々おのおの御幸ありなむといそぎまいりたまへる 此の辞しかたもとめてぞよみける さては平相国の家にて笠かけやぶさめなどしてたのしませられ 御遊びせさせ日ごろへさせ給ふとぞ

治承四年六月三日都遷りあるべきよしにて安徳天皇御年三歳の御時御輿にて御輿に八幡大明神の御供にて雲客公卿御供仕りて参る(?) 政入道もまゐりあひて 池大納言の御所に皇后とも御ありけると云

或曰 新都ハ後白河院文治元年十月出家して重遷ともいふ

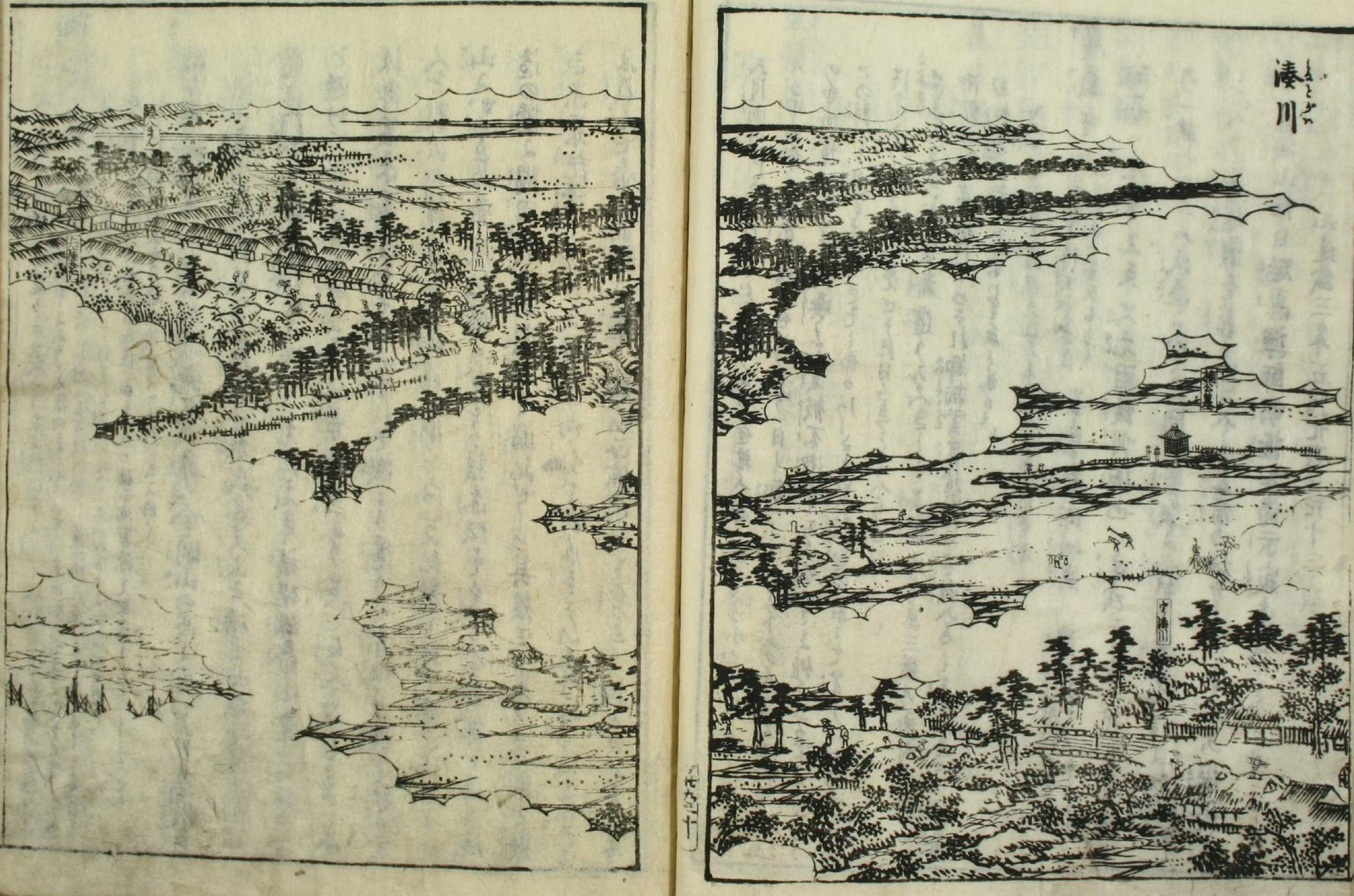
廣巌寺 坂本村にあり 醫王山と号す 従来の正成の菩提所なり

本尊薬師如来 毘沙門天 正成の守り本尊

開基ハ元亨元年大元國僧明極也 ○建武三年五月廿五日楠正成の一族七十二人民屋に入て六間の客殿に二列に並び一同に切腹せしところなり 其遺骸を葬送し今の石塔の地なり ○本堂の額楠公の書

開山佛日焔恵禅師明極和尚示寂建武三年九月二十七日

楠正成戦死建武三年五月廿五日行年四十三歳


湊川（みなとがは）

楠正成石牌

或曰正成が首ハ妻子に送らるゝの久しく在る観心寺に葬る此時の物か又坂本村四囲の中にあり永禄に来水戸黄門光圀卿の未だ建ざる家臣佐々介三郎等おもむき村老の云伝ふるを此牌ハ一夜の内に淹しく遂造して其跡ハ塚上に松樹あるのミ

○牌ハ和泉石にて塔中石槨に因て表一面を嗚呼楠正成霊源光圀造立とある背の撰文ハ舜水の文なり摂州図会に出されハ爰に略く

楠正成ハ河内の人左大臣橘諸兄の裔也金剛山の西に居て家に楠樹多し因て以て氏とし父ハ正康母ハ某氏志貴山に祷て正成を生す山神毘沙門なる故多聞とも呼べり元弘元年後醍醐帝小条高時の兵を避けて以て笠置寺に幸し帝適夢あり是を占て正成なることを奏す即藤原藤房をして之を徴さしめ還りて赤坂に於て義兵を起し数千余人を殺し此後鈎縄に沸湯の術をなし以死骸を焼て城を去て金剛山にかくる後帝隠岐国に幸する後赤坂を守る不定佛を淳し渡辺の橋に隅田高橋の数兵を溺死せしめ其後天王寺に於て聖徳太子の未来記を読て大いに悦びあり終に北条亡るに及んで帝舊都に還り給ひ正成京師を守らしむ延元元年

足利尊氏朝を犯し正成宇治の大渡に出て帝叡山に幸し勝に乗りて尊氏京師に入るに及んで従数十人に語て従しめ屍をとりくゝるさまぐの計策をなして終に尊氏を西に走しめさり後しる尊氏直義と共に大兵を水陸より引て兵庫に至る義貞之を拒む此時正成に勅して兵庫に出て義貞を助けしむ此時正成諫奏して云尊氏九州をせめて軍勢必盛なるべし我疲たる兵をもて恐くハ当るの勢ハ危くまづ義貞を還さるべし若ハ又山門に移しまいらせば尊氏京師に入るべし其時臣ハ河内に還り畿内の兵を招き河内より尊氏が粮道を絶て其ハ疲を待ん然後義貞より攻ハ一挙にして退ぐべしと道理をせめて解といへども帝かの廟議とて坊門清忠の言につきて聞召入られざれバぜひなく湊川に戦死す

○賛曰楠正成の兵を用るハ機に変じて勝を制するハ孫呉に似たり忠勇壮烈なるハ唐の張巡と相似たる（張巡ハ安禄山と戦ひ討死せし忠臣なり）張巡睢丘を出て睢

陽を守るは正成赤坂を去て千破剱に據がごとし韓愈が謂所まづるる百の卒の決牙に盡るをみて百万の勢の日々に滋きの師に戰ふ者なり寡をもつて衆を撃ち奇策を出して窮はし廟謨不臧元凶接踵至驕りて臣使ひて正成がごときものゝ言は却て用ひらるざるは天子自一方望の長城を壊て敵の勢ひを強ふするがごとし是れによりて中興の業己よりまさる嗚呼欲しき哉湊川の戰ひ正成自殺に臨んで身を正し季の言を守るなどのいかまでもかの張巡に似たり忠義の心は天地と窮め万古に亘りて泯びれ身は死れとも今に存する哉生るがごとし正行遂死を受て報義旗を建先に節義を尽し一死をみて國に報ぜんと謂べし忠孝両ながら全し其外宗属にいたるまで皆力戰して死しても節義を失はず一門不殘忠義の鬼となるものは先には正成の教ゑ導くの效ひ之

湊川（みなとがは） 兵庫の北口にあり源は丹生の山田東小部西小部藍那小河等の溪川三流合して石井村に至り夫より下流兵庫の津にいたりて海に入る此流あぶなく水推に

まゐらすゝ右へは石井より湊下山の麓を西へながれ兵庫の山の西より大和田の浦にて海に入平相國兵庫の築島せられし時湊口の難を避んがために今のごとく川すぢをかへりしと兵庫の湊に附て名つけらるなるべし

玉葉集　みなと川浮寐の床にきこゆなり生田のをくのさをしかの聲　能兼

湊山（みなとやま） 川上烏原村にあり名所なるが是来らし新勅撰に古歌あれどもしばし此山の事をよまれしとぞ

祇園寺（ぎおんじ） 信蓮坊烏原村にあり法然上人の弟子信蓮坊開基なり僧て西寺御影の弟子ひとを帰ひしとぞ

小峯桐局塔（こみねきりのつぼね） 烏原にあり西園寺御息所にて後京極殿のむすめ寛永三年二月十四日此所に年ありて身をうけられ信蓮坊をまつりて今信蓮坊の名は始まる

夢野（ゆめの） みなと川の西海石の西北にあり 風土記に云昔此に牡鹿あり其妻を牝鹿に語りて曰く背の上に雪一重生ふと見て其ことに霜多く積りしを牝鹿是を聞て自ら是を生ずる、薄幹斧に貫くの相なり又霜は白塩完肉に塗るの相なり、是を夢ひて他に走る、かなしとも牡鹿きりにして終に矢に中るより夢野といふ

一説に夢野は菜刈の云にて是この蘇なるべしと菊亭大臣即に菜刈といへりて帷高ことの御狩場なり即に浦津とうつり風土記の説も信じがたし

夢野清水（ゆめのしみづ） 夢野の山中にあり中山寺の前にあり 此地は雄登守教經の陣所のとりひ故へて渇きを陣場の井といふ、是を汲んで今湯泉とし俗呼で氷室の湯といふ是は夢野の

氷室といふ事を歌書に語り加へしと又浅く人多かるべし
○歌書にいふ菟我野は此地なるべし并日本紀に菟我野の鹿を菟我野の鹿に作りて
いふ事ありてより此菟我野の墓とつくよ語りてつげ野といふより氷室の名あるに
つけて又語より菟我野は此地にてトガ野は大坂に古地ありつげ野は大和なる氷室に
大和のつげ野にあり

鴨城 菟我野より南二丁坂口なり播磨三本に室への
名之たやすく城中なるのをもつて

會下山 一名延秋山といふ兵庫の地より北三丁の平山也延喜式中に紫出せし所也

神馬塚 和田の地にあり神功皇后三韓より帰朝の御時龍馬をのせつれしに此所の人社を立て真此
尻側よりも今に山城国男山の八幡宮の神馬の塚と称するとびなりとぞ

兵庫津 一名論田の浦大輪田武庫の浦ともいふ兵庫の町名に十二に宮内国方
南濱小濱の別ちあり 摂州関大坂よりきえの白しむろ兵庫の津はこれより西なり
山よりのそへて濱海辺町なる人をなして東へ
漁村漁家の何家を港州入津恵美須天王寺近
大坂よりの船着く湊にて泊る東南
の風を除き涯の南百歩許を濟之○此海の底に洲あり長くして
菟原郡深江浦に連る毎年三月潮涸る時此の洲あらはる
天長八年 淳和天皇の御時 三月入唐使の船を此津の南の海中に出る
といひしは先之これ古人の御海といひて大和田の古堤之水涯甚深しと
て十二三尋ありて船舶の最良なる所之

玉葉集 夕づく日さびしきと漕舡のゆくかたにひくやむこの浦風　入道前太政大臣

兵庫といふ地名ハ俗傳に神功皇后三韓征伐の時此所に兵具の庫を建給ひし故に号くと云

或曰つはものハての義にて地名とすくなくハなし即兵庫の地を川によりむかしてさて南へめぐり兵庫ハ其の名也 ○日本紀神功皇后三韓征伐の時皇后乃舟未に難波をさして行給ふに舡海中に廻りて務古の水門に還りしとあり今の兵庫の湊たるべし 古書に兵庫を武庫と書しもまた見之武庫の湊といふもこれなるべし

玉葉集 住吉の松かゝりて見渡せばむこの泊とつゞく舟びと　某人

佐比江

上古よりの入江にして 佐比江名義にあらじ滞りぬ江をさび江といふ 攝津志

此地新地となりしは元和のころなるべし

若狭守経基墓

佐比江橋の北にあり平相国清盛の次男なり

築嶋 一名経ヶ嶋

但し経が嶋ハ其所にありて聖武帝の時行基菩薩創しし此地ハ法華経を埋めて築るれバ一名をも経ヶ嶋といふ今の兵庫の市中ハ皆築嶋をもいふべし

鎌倉実記 平相国清盛此地を築くは民の煩ひを去りけれバ兵庫に湊る悪風にて舡のたよりあし是より末代天下の至宝にして諸国入口田地とぬり人家も増長し諸国の舡の便よく交易盛んに行るゝ其功実に若行ものなし柳此嶋を築くの条ハ攝津和田が崎雑波浦ハ往還の海門天下運送の要津なり

平家の勢威萬国に及ぶといへども東国の八平氏関奥の夷族に怨ありし故を以て清盛かくはかりし京畿ともなる要害の府城をうつしまゐらせんと徳長久の地を考ふる小津国福原より勝るはなしとて人君居の礼に背くとも中国西国の人々をも心のまゝにせんとすべし須磨関を築き其南山海の大城戸を開て舡路の通路を便りとせんとまろふ兵庫ハ雑波湊とて舡の泊悪敷なりけれバいつとても風にも堪へかたくはかし鳴門の汐先を切て湊を築き兵庫を湊とせし雑波の入江には高洲を押し流し江口神崎へも通じ舡を入茨木長柄迄も摂河両国の水路をよくし淀一口巨椋河内の海迄も下りのぼりし田畑に利あり淀川の水をよく利せしむる瀬の往還容易く畿内の物産天下の宝となるべしと先を備前氏国が定め方便を加り築への忠次郎貞能門司の関内並紀伊国景則を奉行として長門周防丹波播磨紀伊和泉より役夫を出させ飛騨匠木工寮の仙方を以て内裏修造料米の正税といへども御取分料の外に十分一の課役を立て不日に功をなせんと應保元年二月八日に築はじめしが程なく風破の為に八月の日に大風大波立て一夜に先を崩失ひ諸方をさしてまたかくてまた三年の稀世阿波民部重能を奉行として終に成就せしと云

○人柱のさたハ畿内の関所へ及びし二月廿八日より一日一夜に一附で宿と定め人を捕め捕て築嶋の柱とせしを率べて奉行阿人諸侯人大工雑役

石工弘叙の者まさく其職おろそかなるものハ因て人様の数よ
入ら聯漏させまりし是ハ全く工叙の者よ為りさせまじきの計略ふして
進みつて因ら退しよふす諸書よ此清盛を平家物語ふはくへ人様の
悠縱なつ是とも罪業さるべきのこくらふ石よ経文を書て築れるまふ
こそ経が嶋の名もみそれされバ松王小児のすなハち書よもハへ人様ハ罪
業之ちく経の功力をかりたるすれハ松王がすなハ実置しらハつひよし執
房卿の為よ人様となれ心の様之
よしいかなつても様もつよらしむさへざしめやその由さへさ
いよいよく人様のすなハち清盛が旨一つよありて大功ハ立しめる其勢ひよあしされバ
人へ怒べき時のいかん実よ莫大の悪業之○今兵庫の里俗清盛塚
つひそのとふもむべなり

碇礁 北にて近国の名主薩之一説よキフキる小凪のむかでさざとらつまらさて小凪とこゝろえん 是当津の旧家にして家僕八家の内とく小凪とのふる又百年斗お焼の家なる よいかり家あり義貞の感状あり元書よ譲りて家よ男にし

能福寺 逆瀬川町にあり 天台宗 開基伝教大師 中興長盛和尚宗徹山と号す 本尊薬師如来

観音堂 本尊なかりしよ 寂然良乃御作の

真福寺 同町 本尊如意輪観音 江州石山ごころの本尊とひとつ木にて彫刻の霊王 蔵王權現よ伝しとなり

輪田岬 和田の社より辰巳の方八町斗 海面の湾中 築出して並木松数十株をうへたり
是兵庫津第一の要所之即清盛の築所西方の風波を防ぎ鳴門の
汐先を除きて舟よ万船をとゞむかる也又ハ月を賞して騒客集まり
畿内無双の勝地之今の岬ハ清盛の築し所ふは勝まらり今よ年く
洲崎をのぞり出て長くなる之是自然の理あり明石麻海よ似たり

和田神祠 和田のさきにあり南浪の大神とぞ例祭ハ九月廿三日 当津能福寺兼帯の末なり

和田三石 三ツ石の社ハ和田新田にあり 和田の社乃南 九鬼田中にあり
一名經戸塚とらへハ古名なるべし 新田の社ハ古地の経か島を埋しめ所海浜ハいろく見
はりしものなり三ツ石ハ大将石の性なるべし

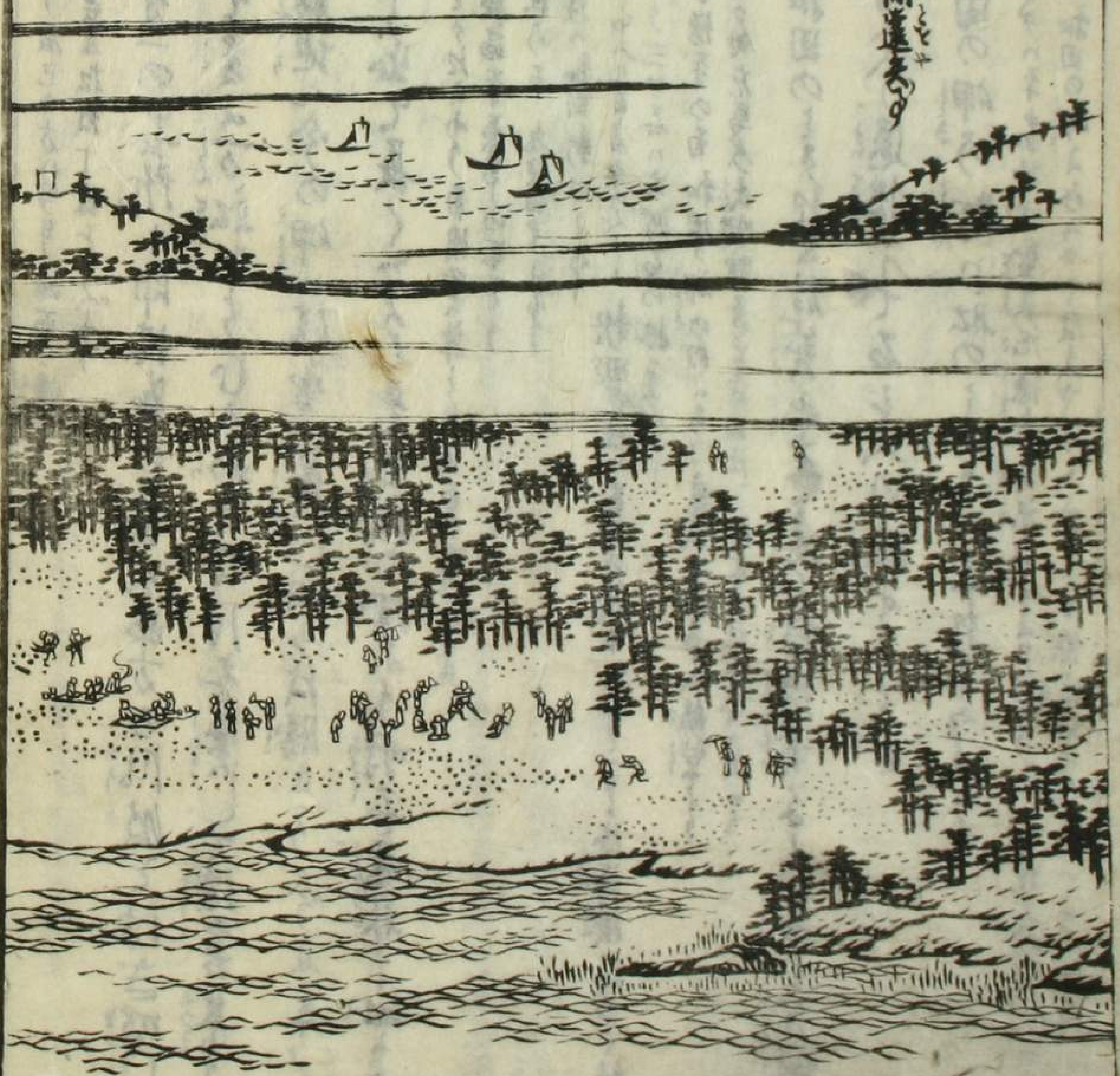
燈籠堂古跡 を清盛の南和田が岬の内にあり 建武の比ふ為氏難避しより より尊氏足馬は民明燈籠堂の古跡と津下しれ古跡をふ久り
伝云 上ハ条入道此和田のさきにて燈籠堂を建て持経者を人集て万燈
會をおこひ給ふ今退轉して石など人の跡ありとぞ云

夫木集
わくげつ和田の岬の灯ハ船のしるべやりと見えしかりけり
此燈籠堂のことは平家物語盛衰記鎌倉実記などより見ゆるの記燈籠堂の名あり
義貞津下和田の岬よみゆるとは文やまへ見どれど佛場の名なりいふぞ其功く

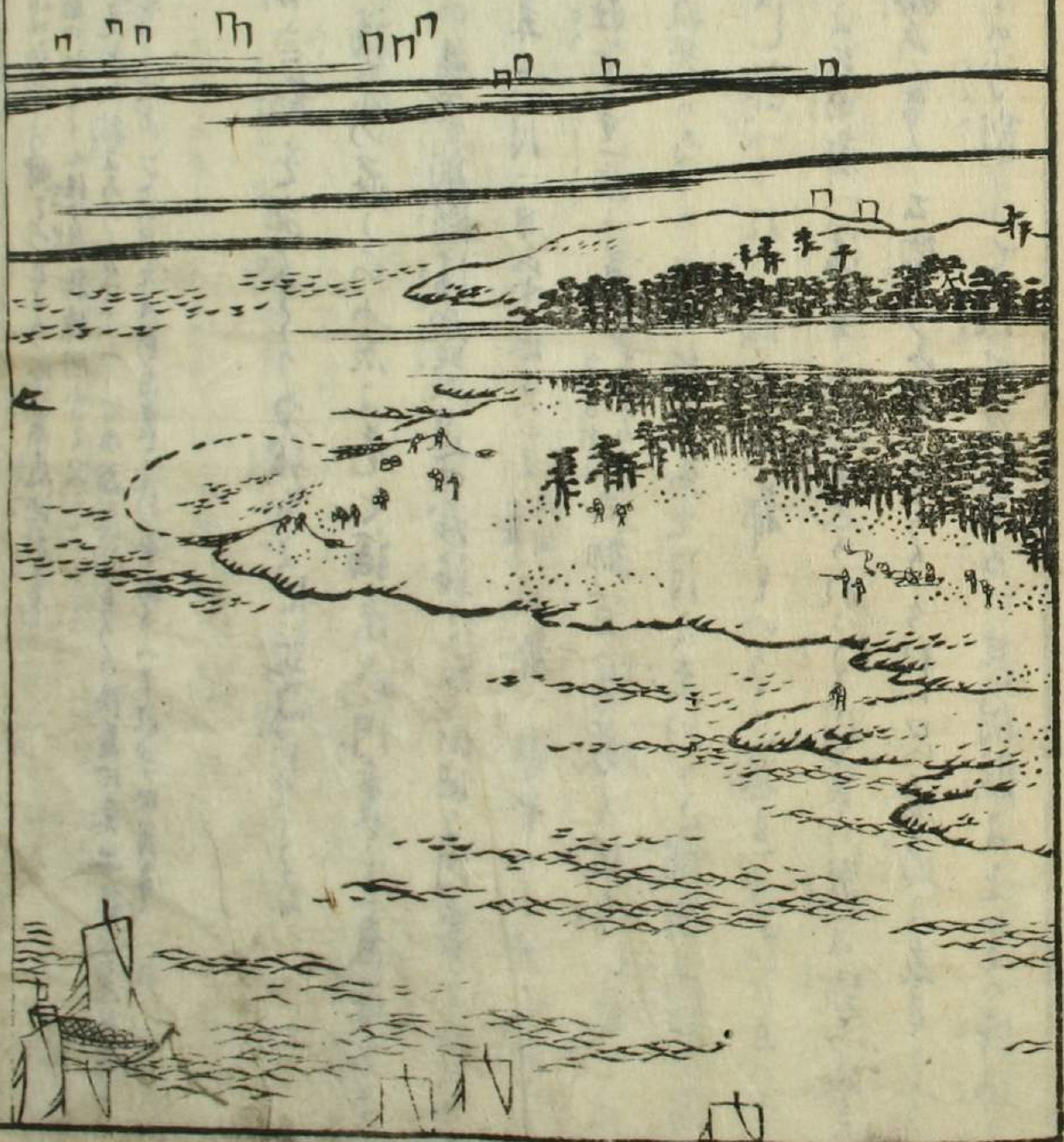
其二

和田乃岬 希が同遠奏す

新田足利松ら
陥こいまき
我ハすまれ
を間繰召
平氏和田乃
御勝乃馬寄
よせこ入対
をあはこ中る
ハ将軍鏡
より沖上洛ハ人
で定めて籠屋
の屋の傾城も
多く召見せ
ら豆ハらん



其さあみ勝
しき御着一刀
進らせはさん
志がく御結
は入らみまくよ
まるく飛より
る勝乃浪か
上游さがんて
二人乎ある奥を
の舞をつらく
さ沖の方へ
飛行を小松
そこの中より
駿をかけ出て
進さまみぞ
はさりける
ある乃奥を極を
あがる大友か
松のやうさり



和田小松原　東は兵庫の町はづれより西は東尻池村まで一面の松原なり経ヶ島摂津国なりて又こゝを

内裏跡　東尻池村松林の内方四町ばかり也又清溝尚ありしより○治承四年安徳天皇大皇が山荘を皇居とし同月九日新内裏に行幸ありしは此所なり同年

福原旧都

玉葉集　福はらのふるき都をすぎけるにあれたるを見て(?)ちよたしや鳴けるらん

兵庫の地は福原の荘といふ所にて是を福原の内裏といふ應保年中築嶋が新の後平相国清盛入道の別荘として此地に内裏を経営し治承四年六月二日安徳天皇（三歳の御時）此都へ遷幸ある邦綱大納言頼盛の山荘を皇居とし（荒田村にあり）公卿百官悉く供奉し奉るとはいへども願はぬ者はありけり然るに九月に至りて諸国謀叛の者ども多きにより新都はいかにと恐れ給ひけるが十二月二日俄に旧都へ還幸ありけれども内裏は既に毀ちぬ主上を始め奉り公卿の家もなかりければ只路道にさまよひ給ひて住せ給ひける○其ち所既に上皇は幽閉

別荘を築き御所とし法皇は幽閉の別荘に押しこめ奉る是清盛が我侭にふるまひし事也

平家物語云都を福原へうつされて後平家の人々夢見もあしく常は心さわぎして変化の物ども多かりけり或夜入道の臥し給へる所へ一間にはゞかる程の物の面出来てのぞき奉る入道ちつともさはがずちやうどにらまへておはしければたゞ消えに消えうせぬ又或時は虚空に大勢の声して笑ふ事あり又或朝入道帳台より出て坪の内を見給へば死人のしやれかうべどもがいくらといふ数も知らず後には一つになりて十四五丈もあるらんと覚ゆる大頭の目を開きて入道をはたとにらまへたり又馬の尾に鼠が巣をくひ子を産みたるを怪しむなど様々の物怪あり

西行家集　福原へ都うつりしと聞えし頃伊勢にて月の歌よみ侍りしに

雲のうへやふるき都になりにけりすむらん月の影はかはらで

○讀古事談云上ハ波羅の大政入道福原の京にて諸卿の弁官の外は皆古京に残りける人々を常に召し寄せんとて古京の事を議せらるゝ時さしかかる人も尋ねまゐらせよと仰せける長方卿ひとり少しも心をかはさず此京をそしりて立てはもはや出仕すまじとてこもりゐける定めて又古京へ入るべき縁に移りぬ後に其座にありける上達部の長方に向ひて楓もなげに申しけるはこのさがなの悪人のとしふりて古京をたてけるはいかにいひしぞといひ出しけるに帰京の後あるまじきことをいひたる

あらたまばいかじ後はまでと云ふれば此女我やうは似ざる美人入るの心なるなんとくこそされつれしが其后は廣く漢家本朝を捜せるところより
ね新君を訪ひけるものをはじめとも見えたりけんは合せるるなし其の志をざおしくやむ心ありてたんには向へ先生後京のる外まいつきて後両京のきたの紛ひ一つれまじるくやしうあり二日くつあるを志りてききされバはじつれ言葉をと抑しむべきとぞいはまる　然ば其後に人に誠らまへんとしたる時も此入道なれ世ゆるゆて長方卿は車の外に物を見へける人とぞやもとく人は語りしめかうけちを後と此人と賞せられける人様が堀中納言の妻まの定めとくく其時の人の口に乃ある云云

真野（まの）

真野浦　真野池　真野里　真野継橋　真野榛原

万葉集の古詠多し今東尻池の内に其古名遺てりとはいへども実は今さ来のことなくんじめくて此兵庫の古地より西の広き所どなべし猶ろに論書

国名の混雑多し殊に多く紛ありては

真野浦真野入江は　近江　真野の榛原は　大和

真野の淀の継橋は　摂州　真野の萱原は　陸奥

かく悉くまぎらしぬるゆゑゑるたがひ語るなり

○万葉集第三

高市連黒人歌二首

まきもこに猪名野は見せつ名次山角の松原いつかしめさん

いざ子どもやまとへはやく白菅の真野の榛原手折りてゆかん

黒人妻乃答歌一首

白菅の真野の榛原ゆくさくさ君こそ見らめ真野の榛原

此歌のくだりのうたは黒人は大和の都の朝の人なるを任によりて摂津国に継来りの事なり行くさくさは往還の事なり

万葉

真野の浦乃淀の継橋心ゆも思ふやいもがゆめにし見ゆる

同

真野の池の小菅を笠にぬはずして人のとほ名をたつべきものか

武蔵刺史平知章墓

尻池村の川上街道の南側にあり詳記の本は此の所なりしが享保年中並河氏摂津志編集の時その巡行し此の所に石表を立つ又其代まで詳記し後は其氏名を失ふ西海道往還の側今の地に移し往来の行人又は此墓を物語し共に其忠孝を嘆ぜしめんかたなりとなり

知章は新中納言知盛の子なり知盛一ノ谷落城によりて須磨へ向ふく落ちゆく児玉党のに追付て打てかゝる父新中納言危く見へ給へバ御子武蔵守知章中に阻り引組で馬より落て是て推へ敵の首を掻切る所へ敵の

童どもを落重りて終に知章を討てけり又知盛の侍監物太郎は其の童を討て腹掻切て死骸を遂る其後知盛は舟に乗とて名馬に打乗り然るの海期監物が自害せしくと見て海上三丁斗游て船に乗移りて落ちさしける

監物太郎頼賢が墓

知章が墓の北田中にあり是も並河氏の建る所

監物は知盛が侍也御子知章討死し給ひぬれば落合童どもの首を切て忽ち主君の骸を敵に渡す童どもの首を引さげ馬に乗んとせしか馬の腰節を射られて今はかなはじと立ながら腹かき切て死しけり

越前三位通盛墓

知章の墓の北東の松に五本塚あり盛衰記云越前三位通盛は湊川の端を下りに落られしが木村源三成綱に組で討れ給ひし也又平家物語云通盛卿は山の手の大将軍にて坐せしが其勢皆落て討死せられしとて今西小手村の辺にあり又摂津志に平通盛墓は焼死村の東にありと書るは今此所を見るに安からず平家物語の文によりて云べし通盛卿の墓も他所にはあらじとこゝにむかしの湊川は山の麓を巡りて焼死村の東に流れて海に入りしとぞ

木村源五重章が墓

通盛墓の側池の中にあり源氏の武士近江国の住人木村源吾重章は平通盛と組て爰に討死しけるよし平家物語にみえたり

苅藻川

右塚の西御道の小川也○源発越より長田を経て庇池をすぎて海に入る

平家物語 平重衡湊川苅藻川をうち渡り蓮の池を右手に見て駒が林を左手になし板宿須磨をうちすぎて西をさして落給ふ

播磨名所巡覧図会巻之一 終